
マインドウォーカー

しき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マインドウォーカー

【Nコード】

N5884F

【作者名】

しき

【あらすじ】

読んだほうが早……くないか今回は。中世っぽい雰囲気の中世っぽい荷物と現代っぽい主人公が旅してます。

プロローグ 語る必要も無いことについて（前書き）

本編をすぐ見たい方はここは飛ばして構いません

ブローグ 語る必要も無いことについて

人生は一通りしかない。

それはただ前提として、原則として一つあるだけで、誰かに操られたとか、運命に定められたとか、そういうものではない。

もちろん、僕の言うことが正しいことだとは思わないし、そんなことはどうでもいい。

もとから確かめる術など僕らにはないのだから。

意思し、そのとおりに僕の体が動きさえすれば、問題はない。

しかし、それでも、僕の人生のある期間、僕は誰かの明確な意思によつて動かされていた。悪意、あるいは善意でそうしたのだろうが、その事実だけは間違いない。

これは、僕の物語だ。しかし、僕の意思の物語ではない。

一章 渡される脈を打つ浮遊する

届けるものは届けた。準備するものは準備した。もうここに用はない。

当面の食料と水、身を守る一丁の拳銃、ナイフ、寝具、エトセトラ。それだけあれば大丈夫。

大抵のことはこれらでなんとかしてきた。

今回はそんな大した移動ではないが。

元々その街に存在しなかった人間が自分勝手に入ってきて、そして勝手に去っていく。それだけの話だ。

それらしい城門や目印など無い。こっちで勝手に区切ってるだけだ。正式な線引きがあるんだろうが、そんなものが今関係あるとは思わない。

歩を進めるごとに、徐々に人や家屋は徐々に姿を消し、自然が景色を満たしていく。

この道に名前はあるだろうか。あつたとしてもその名を呼ぶものは果たしているだろうか。辺りを見渡して、一本引かれた道と、背の低い草木を見ながらそんなことを考えた。

一人で旅を始めてからどのくらい経っただろう。満月を一人で何度見ただろうか。記憶が正しければ、この旅は二年と少し、誤差は否定できないものの、続いていることになる。

大した冒険譚などない。ただ先人によって繋がれた道を辿っているだけだ。新たな大地を見つけない、未知の世界に行きたいなどと考えたことも無い。ただ彼らと僕が共通する認識があるとすれば、「何かを伝えたい」という一念、それだけだろう。

でも、僕のようなスケールの小さな願いが彼らに及ぶものであるはずが無い。

それでも、僕にしかできないことを今している。そう考えながら、足を止めずに、進む。

木製の車輪の回る、ガラガラという音が聞こえてくる。徐々に大きく、やかましくなっていく。

そして現れた馬と荷車、そして老人。行商人かその類だろうか。深く考えたことは無い。

「ちょっと兄ちゃん、そう、あんた以外ここには居らんだろう」

こういう人に呼び止められたのは初めてだった。

彼らは僕を、僕は彼らを、風か何かだと思って生きているのだと思っていた。事実僕は今でもそう思っている。

老人は馬を止めて、そこから降りる。

全身を布で包み、素顔は見えない。何かの宗派だろうか。たまにこんな出で立ちの人を見ることがある。

「兄ちゃん、いやお兄さん。まあちょっとした頼まれごとを引き受けちゃくれんかね」

僕を持ち上げるあたり、ろくな内容じゃないのだろう。

金銭が絡んだらすぐに話を切ろうと思った。

それにしても、老人の声はそれとは思えないほど若く思えた。よく考えれば素顔を見ていないのだから老人かどうか今見てもわからない。

老人として作った声に聞こえる気もしたが。

……いや、もうやめよう。大切なのは頼まれたほうの案件だ。

老人は馬車の荷物の中から袋を取り出して、僕の方へ歩いてきた。

「こいつだよ。引き受けてもらいたいのは」

老人が袋を差し出した。

「これは何だ」

こつちが手に持った瞬間に何かされたらたまらないので、こちら
も慎重に対応しなければならぬ。

「用心深いねえ。まあ、今回はそれで正解なんだろうが」

老人はため息をついて袋から中身を取り出した。

息が止まった。粉の入った袋か、宗教関連の書物かを予想していたが、僕の予測範囲内にはおよそ入りきらないものが、その袋には入っていたからだ。

「まあ、俺も商売仲間に強引に押し付けられたもんでね。俺だってこれ見つかって客に何か言われたら困るんだ。あんたならその点心配は無いだろ？」

それはそうかもしれないが、この場合の問題はそこではない気がする。

「じゃ、頼んだよ」

呆然としている僕の手を引っ張り出して、再び袋に入れたものを収めた。

僕はただ不測の事態に頭を回していた。

馬車に乗った老人は再び車輪の音を響かせながら、ようやく落ちていた僕の立つその場所から、遥か向こうへ行ってしまった。

袋の中に入った、今現在も脈を打っている『心臓』が、神も悪魔もない世界で、今、他の誰でもない、僕の手の中にあつた。

すぐに返そうとして、老人の向かった先へと急ぐ。僕が今まで歩いてきたほうの道を折り返す形になる。次の街は今から向かえば夕方には着くことができる。しかし面倒なことになってしまったのでそれは叶わないかもしれないと思った。

再び家が見え始めたところまで走ったところで息が切れる。そのくらいの力を出して走っても馬車の姿は見えなかった。逃げるにしてもそれは早すぎるのではないだろうか。荷車には荷物だつて入ってるだろうし、それほどスピードを出して走れるものだろうか。荷物は落ちないのだろうか。

なにしろ、僕はこの面倒極まりない荷物を任された、という事実を認めるべきなのだろう。

誰に。誰のために。

まさか消えたわけではあるまい。街にもう一度戻ろうかと真剣に考え始めていた。道は一本しかないのは間違いないし、夕暮れの近い今、老人がその街にとどまる可能性も十分にある。

だが、その提案はすぐに訂正されることになる。

ようやく僕は気づいたのだ。車輪の跡が無いことに。

最初から無かったのだろうか。そのくらいこの土の道は固いだろうか。

目的地へと再び歩き出し、その審議を確かめることにする。

車輪の跡は見つかった。そしてそれは途中からすっぱりとその跡を消していた。

土の質になんら変化は無い。横道にそれで跡を消した可能性もあるが、草や木が茂っていてとても通れる状態ではないし、そもそもそんな工作の時間は無かったはずだ。

なんなのだろう。僕の旅する二年と少し、それに加えてこれから旅する未知の数年数十年分の不思議が今、一気に降りかかってきた気がした。

ため息が漏れた。僕がどうにかするしかないようだ。

とにかく見た目のいいものではないので、袋越しに持って考えることにする。

あの老人は僕が預かること以外、何の条件も提示してはこなかった。それは、貰った後は僕がどうしようが自由だ、という意味になるのではないか。

冷静に考えてみると、どうもこの心臓が偽物の作り物だという気がしてきた。

あれだけの消滅マジックを披露したのだから、心臓の精巧なレプリカくらい作れたっておかしくないのではないか。

袋から心臓を取り出す。脈打つ感触と普段目にしない造詣に冷や汗が出る。

もちろん本物を見たことは僕自身は無い。それに近い光景は目にしたが思い出したくは無い。書物でその、心臓という臓器の形と働きを知っている程度だ。

もしかしたら老人はすれ違う人全てにこれを与えて楽しんでいるのかもしれない。そううと内心穏やかではいらなかった。

でもそのような噂は聞いたことが無いし、老人が消えた以上僕のとる反応は最初しか見られないはずだ。

ごちゃごちゃと考えたが、結局こんなものに僕の責任はない。とりあえずそれは確かはずだ。

それでも、よく見ると、血管からは血が流れていた。どこへ向かっているのだろう、その流れさえもすつぱり

と空気の中に消えていた。循環の一部、それもたった一部が今ここで行われているのだろうか。

生きている。

もしかしたらこの心臓は生きてる人間の一部なのかもしれない。確証を求める手段などあるはずが無い。とにかく、僕がその人間を殺すという結果だけは避けたい。

まず、確かめなければならぬのは、『僕である必要があるかど

うか』だった。

森の中にある程度入って、心臓を置いて、自分だけが戻ってくる。これで何も無ければ、近くの村の誰かが見つけて、それぞれ方策を練ってくれるはずだ。

だが、これも上手くいかなかった。

どうして心臓が空中に浮いて僕のところへ戻ってくるんだ。

もう僕には何もわからなかった。考えることもやめたくなった。

とりあえず、心臓は浮いていてはいけない気がするので袋に隠し、リュックの中突っ込む。

さっきの老人のように、誰かに預ければどうにかなるのだろうか。むしろ、それこそが手段なのだろうか。与えた人間が消えるとかそういう契約もあるのだろうか。

とんでもないものを抱えて僕は歩いている。今放り投げることはできない。

生きているなら、なおさら捨てるわけにはいかない。

足元が暗闇と同化していく。

細い月が昇り、僕含め全てを、少しずつ薄く照らす。

そこからもう少し歩くと、人の作ったと思われる光が、ちらほらと見え始めていた。道路が整備されていくのがわかった。

次の街が目の前にあった。

二章 一節 w a n n a b e 1

宿屋と思われるドアをノックする。

人の少ない地域なのだろうか。明かりが少なく、見つけるのに少し時間を要した。そもそも僕はこの場所に用があつて来たわけではない。目的はもう少し先のほうにある。

ドアが開いてエプロンをつけた婦人が出てくる。

僕は頭を下げて今晚の宿を頼んだ。素泊まりで普通の料金を払うから一晩泊めてくれという内容だった。

別に駄目だったらどこかの小屋でもいい。寝具を携帯しているので問題は無い。

快適かそうでないかの違いだけだ。

「いえね、お金ならいいのよ。払わなくて」

思わず顔を上げたが続いた言葉にまた頭が重くなった。

「一つだけお願いを聞いてくれるならの話しだけど」

……ここで朗報を期待するものがどこにいるだろうか。

本日数時間前、頼まれことから始まった狂気のマジックを目の当たりにした後だ。何があつても不思議は無い。いやむしろ不思議だらけか。

もういい。くだらない言語のマジックは。一泊分払えばいいんだろ。そうすれば嫌な顔でも泊めてくれるんだろ。

「私の娘と少しお話して欲しいのよ」

婦人からの条件はそれだけだった。

さあ、少し考えてみよう。

僕だって綺麗な人間じゃないから金を払いたくないときは払いたくない。同じものなら安いものに食いつく事だって当然する。

こっちの依頼は至極、まともなもののように思えた。それに、場合によっては僕の特技を活かす機会も生まれるだろう。僕だって、代金分の以来をこなしたと思いたいし思われない。

その娘が心臓だったりしたらちゃんと金を払って、そうでない、全うな人だったら素直に以来に従おう。

そう心に決めた。

「あの子、外の世界を見たいっていつも言ってるのよ。村から出て遠く当ても無く旅がしたいって。そんな危ないことしちゃいけないって旅人さんから言ってもらえないかしら」

まあ、その手の話ならいくらでも持っているので大丈夫だろう。後は相手にさえ問題が無ければ今晚の出費はゼロで済む

「ちょっと待っててね。いま娘を呼んでくるから」

出てきたのは普通の年頃の女の子だった。

「ご婦人の娘さんですよね？」

一応聞いてみる。

「そうよ。他にだれか思い当たる人はいる？」

「変わったところはその、外に出たいという欲求の一つだけですか？」

「ええ。……あなた、随分私の娘を疑ってるみたいだけど」

「いえ、すいません。前に安請け合いをしたばかりにひどい目にあったもので」

それが数時間前だと言う必要は無いだろう。

今日はもう遅いので、明日になってからその娘の説得をしようという運びになった。

ただでさえ金を払ってないのにその上夕食まで世話になった。

旅を続けると時々こういった人情に触れるときがあるのだが、決まって何かこみ上げてくるものがある。それでも、その好意をしてくれている本人に、その感情は伝えないほうがいいと思っている。

感謝の言葉を伝えるだけ、ただそれだけでいい。余計なことを言うとか全部嘘臭くなってしまう気がするから。

やわらかいベッドの上で、それだけ考えた後、意識はゆっくり幕を引いていった。

とつくに目は覚めていたのだが、誰も起きてないだろうから、そのまましばらく横になっていた。この感触を少しでも覚えていようという空しい試みだった。

どれくらいたっただろうか、足音が聞こえる。

その時間から更に少しの時間が空いた後、僕の部屋のドアがノックされた。

「起きてますか」

婦人でない女の声だ。おそらく娘のほうだろう。

「ああ、起きてる」

僕は答える。

「朝食が出来たのでよろしければ一緒にしませんか？」

さすがにサービスが過ぎるのではないかと思っただが、「食べるのは多いほうが楽しい」という至極シンプルな理由で片付けられた。

特に力を入れたわけでもないのだろう。質素な料理がテーブルに並んでいた。僕としてもそのほうが気が楽でいい。

僕が座ると椅子は全て埋まった。僕と婦人とその娘とあと一人、男の人が座っていた。外見からして大体予想はつくのだが。

その男の人はその娘の父親だと紹介された。つまりこの家族の主

人ということだろう。

主人も婦人と同じように、娘の旅立ちに対して否定的だった。彼は旅人それ自体には敵意は無いものの、それにそそのかされた形で目指す娘に対してはなんとかして阻止したいと考えているようだった。

当然といえば当然だ。自分の娘を何が起こるかも知れない大地に放り出す親がどこにいるだろう。ノウハウが詰め込まれた状態で行くならともかく、生まれも育ちもこの小さな町なのだ、彼女は。

娘の方は十四で、自分がもう少し成長したら旅に出ようとしているらしい。そのために旅人が宿に泊まっては話を聞きにいくようになったという。

僕の場合は特別で、夜の深いときに来たもので、娘が話を聞きに行く前だったから丁度よかったのだという。普段は婦人は他の仕事で忙しく、娘を放ってしまうことが多々あるらしい、

彼女の両親は娘がこうなったのは自分たちの責任だと嘆いていた。これは僕の感想だが、ここに旅人は集まってくるので娘がそうなるのは当然のことであると思うのだが。言ってみたところで慰めにならないどころか宿をたたみかねないので何も言わないでおいた。

店についてもいろいろ教えてもらった。

行商人が複数で宿泊することもあり、この宿はいつもはそれなりに賑わっているようだ。今は時期ではないので人数はそれほど多くはない。

今泊まってる僕以外の人はまだ眠っているらしい。時間を聞くと、大概の人は眠っているような早朝だった。どうやら僕は早く起きすぎたようだ。

「ところで君は何をして旅をしてるんだい？」

食事の途中で自分の年が十八あること、生業が吟遊詩人の類であることを明かした。

そこは別に隠すようなことではない。

言っても害にならないようなことだけを話し、話すべきではないところは口には出さない。その分別は自分の中で済んでいるはずだ、それも大分前に。

食事が済んだ後で本題に入る。

後片付けを手伝うという僕の提案を払いのけ、皿を洗いながら婦人は僕に今回の依頼を話し始めた。

とは言っても、旅へ向かわせるようなことは絶対に言わないとかその程度のことだったのだが。

食事の途中で、彼女が一人娘だということは聞いていた。やはり相当に大切な問題なのだろう。声には真摯な感情が受け取れた。

外で待っていないさいと言われてから少しして、娘のほうがドアから姿を現した。

いつもは彼女もこの時間は掃除などとして働いているのだが、今日は特別だということで、二人で近所の河原で話してきなさい、と母親に言われたのだそうだ。

別に断る理由も無いので僕もそこへ行くことにした。

確かに宿の近くには川の流れているところがあった。

僕らはその周りの草の生えているやわらかいところに腰を下ろした。

二章 二節 w a n n a b e 2

荷物は自分でこの草原に持ってきた。

ちよつとした案が先ほど浮かんできたからだ。

「あなたは十六のときから旅してるのよね？」

「旅立った日付はよく覚えてないけど多分そのくらいだろう」

「なら、私も十六になったら旅をしても構わないでしょう？ なぜそこに不公平があるのか私にはわからないのよ」

そこから彼女の主張が始まった。

「……危険なことがわからないわけじゃない。どんな旅人さんに聞いても、『旅は自分でするもんじゃない』とか曖昧な言葉で濁すか、『別な方法で私が満足できないか』と妥協してきたりしたわ。最初は風の吹くところならどこへだって以降と考えていたの。そうでしょう？ 私はいけるところまで行きたかったの。でも、考えてみれば私は誰かに頼まれて旅をするわけじゃない。ただ世界が見たいだけなの、それに……」

薄い雲の浮かぶ晴れたそ空の下で彼女の力説は続く。

「……だからね、とにかく私はこの故郷と、買い物に出かけるときに行く近くの街しか知らないの。旅人さんはいくつの町を渡り歩い

「たか覚えてる？」

「いや。全く覚えてない」

自分が旅に出た日付も、旅をしている期間もロクに覚えていないような男に、それはとても覚えられるものではなかった。

「それってあまりに不公平でしょ？ 片方は数え切れないほど経験を受け取って、私はどれだけ願ってもその一つだって貰えないなんて！ 私だって、ここに二度と帰ってこないわ、とかそういうことを言ってるわけじゃないのよ」

よく喋る娘だなあと言うのが感想だった。もともと宿泊する旅人に話を聞きに行く位の積極性はあるのだからそれは当然だろう。もしかしたらこの子は旅に出てもうまくやっていけるのではないかという気さえしてきた。

だがそれは当然として阻止すべきことである。約束は守るためにある。彼女の両親の依頼はある程度であるがやり遂げなければいけない。

彼女の心の折れそうな話をいくつか、あの朝の余分な時間帯に考えておいた。

彼女の話を引き出して説得するわけではないので、彼女の話ではなく、そこから見える感情の部分だけに僕は神経を向けていた。

別に心を読む力があります、といってるのではない。旅の中で培ってきた、真偽の表情の判定、そこに少しばかりの自信があるだけだ。

彼女が絶対に旅をやめる、という確信が、最後まで得られるかと

うかはわからない。

彼女はさっきので自分のことを言い尽くしたようで、荒い息を整えていた。僕はところどころ聞き逃していたが。

まあ問題はないだろう。

さて、ここから僕が自分の腕を見せる時間だ。

僕は彼女に一通りの悲劇を話した。

民話や伝説が僕の専門だが、調べるとき、中にはこうした嗜虐的なものも聞こえてくることもある。

濁流に村ごと飲み込まれたときの生き残りの話、道中出会うかもしれない殺人快楽者の話、身寄りのない女の子を監禁する男の話……。

ある程度嘘を交えながら恐怖を煽ることにした。人間は恐怖にはなかなか勝てないものだ。

彼女の顔は赤くなったり青くなったり忙しそうだった。冒険に飛び出したいと言い出す人だからやはり感受性は人一倍あるのだろうか。

それにその話は深く自分に関係のあることなので、その反応は当然といえば当然だった。

「でも、でもそんなこと、私自身に起こるなんて限らないじゃない！」

「起こらない可能性もどこにも無いけどね……」

「実際沢山の旅人が無事でいるわ。あなただってその無事な一人でしょ」

「まあ、そうなんだけど、そうじゃなくなるかもしれない」

この程度では屈しないという意味が見えた。多少の戸惑いは引き出せたが、やはりこの程度では変わらないか。

「仕方ないよね。君がそこまで頑なに自分を通すっていうなら、あれを見せるとどういう顔をしてくれるのか、多少の興味もあった。」

荷物から袋を取り出して彼女に見せる。

「これがなんだか君にはわかるかい？」

いいえ、と彼女は首を振った。まあ当然の反応だろう。

「これは僕の旅の途中の産物だ。君にもこいつを受け取る可能性があるかもしれない、ということは覚えておいてくれないか」

そう前置きしてから、袋から『心臓』を取り出す。

「ひゃあぁっ！」

彼女は身を後ろに引き、短い悲鳴を上げる。

「え？ それって……あの、え？」

「そう、誰にでも、君にだってついてる、体の一部、『ここ』さ」

僕は片手で自分の胸の辺りに手を当てる。もう片方の手には心臓を抱えているため二つの鼓動が僕に響いてくる。

「旅をしていればこんな不思議なことも当然のように降りかかってくる。対処法は僕の記憶の限りを探したところで見当たらない」

「それでも僕は旅をしたい。さあ、君はどうなんだい？」

彼女は視線は生々しく動くその物体一つに向けて、そこから離さなかった。

「これ……なんなの……こんなもの捨てちゃえばいいじゃない……」

「捨てたけど戻ってきた。それも、僕に向かって飛んでくるっていう無茶苦茶な形だね。それに、下手したらこの心臓は生きている人

の一部かもしれない。君はそうやすやすひとの命を奪う人なのかい？」

「違う、違うけど、これは……あんまりにも……」

「それともこれは君が預かってくれるかい？ 丁度対処に困ってたところなんだ。君が預かってくれるなら僕も君と一緒に両親を説得したっていい」

「いや！ 触るのも無理よこんなもの！」

当然の反応と言えばそれまでだが少し残念だった。そもそも恩を受けた人たちにそんなことをするつもりは始めからない。と思う。

でももし受け取ったら、僕としても彼女の好奇心をさすがに認めざるを得ないのだが。

ま、ここまでか。

「ねえ」

おびえる彼女に僕は近づく。心臓はもう袋に入れて戻してある。

この辺でとどめを刺したほうがいいだろう。

「君だって、ここにある幸せを全て捨てていくほどの価値が、旅の先にあるなんて思っかい？」

……確かにそれはあるかもしれない。でも、それはただの可能性だ。

それよりは、ここにある幸せの存在を……僕が奪われたそれを、大事に抱きしめて生きたほうがずっと懸命だと思うよ。

そもそも、旅人は僕のような定住で幸せを得られない人たちの集う場所だ。

君のように、希望的な願いで旅をする人はほとんど居ないんだ。実際のところね」

彼女は下を向いたまま黙っていた。

「僕はここの長をしている人のところへ話を聞きに行くよ。一応仕事柄やらなきゃいけないことだね」

依頼は恐らく果たしただろう。話を聞いたら次の街へ行こうと思った。

「待つて！」

娘の声が聞こえた。

「二人……二人ならなんとかなるかもしれないわ！　そうよ！　一人じゃわからないことも二人なら解決できることもあるかもしれないじゃない！」

「お願い！ 私を、連れて行ってください」

「甘えるな」

一人で石を持ち上げる気が無ければ二人でも決して持ち上がらない。
い。

彼女はそれをまだわからないようだった。

三章 一節 白い面には歓声を

向こうに立派なあつてものがいくつも見える。
本当の目的地が近づいてきていた。

僕はあのあと娘の両親には分かれの挨拶をしておいたが。娘のほうは、震える後姿だけを眺めてそこを後にした。
全て依頼どおり。これでよかったのだ。

『娘を悲しませないように』なんて内容は聞いてなかったはずだ。

伝記を収集して整理が終わる頃には日が傾き始めていた。それほど遠くはないとその長からは聞いていたのでわかつてはいたが、念のため少し急ぐ。

そのおかげかは知らないが、一応夕暮れに間に合った。

今日の宿は普通のものだろう。そう何度も面倒があつたら僕だつて疲れる。

男が一人、近づいてくる。僕はこの男が僕に何をしようとするか大体知っている。

街には決まって案内屋のような奴が居て、金を払うと知りたいこと教えてくれる。

今回も僕が街に入ると近づいてくる男が居るのでその類だろうと思つた。

案内屋という呼び方は僕個人の勝手なもので、人によっては情報

屋とか道案内とか呼ばれている。そもそも彼らは正規の職業ではない。ただ同じ考えをしてる奴が各地に偶然居るだけだ。

「こんにちは。へへ、この街のことは詳しいので？」

僕は相場だと思える金を男に渡す。

男は手間が省けて助かるといった表情を浮かべた。

「今晚泊まれる安い宿を探している。別に豪華なやつじゃない。安くてそれなりの機能があればそれでいいんだ」

「そう来ると思いましたよ。まあついて来なせえ」

男は歩き出す。僕は無言でついていく。

噴水のある広場を横切り、そこにある十字路のうちの一つに入っていく。

道は段々と狭くなり、道路の質も悪くなっていく。建物の密度が上がっていく。居住区かなにかのようだ。

いくつかの曲がり角を終えたとき、それらしい看板が見えた。

「ここですぜ。若い旅人さん」

「ありがとう」

僕は更に、少しの金を男に与えた。

「明日、見世物をやるんだが、それらしい場所を教えてくださいませんか」

「へへ、そうですね……噴水広場の隣の市場のどこかでそれらしい募集をかけてるのを見ますから行ってみてはどうでしょうかい？」

男は少し間を置いてから答えた。

「もう行つていいよ。ありがとう」

「へへ、こちらこそ」

男は僕らが来た道を歩き出した。こうして男はこれからもうくつもの旅人を導いていくのだろう。

男の選択は的確で、値段も店の具合からしては結構安く設定しているように思えた。恐らく宿を建てた位置が悪いのだろう。あのよ
うな男の先導がなければ客が来づらいところがあるのかもしれない。
男がここの店と絡んでる可能性もあるが、それは別に僕の不利益
にはなつてない。

どうでもいいことだったので僕はそこで考えるのをやめた。

旅の大抵すごすような夕食と睡眠。

翌日、宿屋の店主に市場までの道を聞いたのだが、これが結構複雑だった。

市場は噴水広場まで行けばわかるから、と言われたのでその通りに、広場までの道のりをしっかりと覚えた。

道に迷うようなありがちなこともなく、噴水広場に着く。伊達に

二年も旅はしていない。

そこから賑わっているほうに向かえばいいと言われていたのをそこで思い出す。

噴水からの十字路のうち明らかに賑やかな音が、一つの方角から聞こえることに気づく。どうやらそちらのほうで間違いないようだ。

沢山の人と店でごったがえした道を進む。どうやらここで当たりのようだ。あとは情報屋の言っていたように見世物歓迎のような表示物を見つけられればいいのだが。

ああいう商売（情報屋の方だ）は信用がものを言うので、きっと正しいと僕は信じてるし、それで期待を裏切られたことは、偽者に捕まった一度、それだけだ。

一際の歓声が向こうから聞こえる。行ってみると、サーカスのような団体が大道芸をしている真っ最中だった。この市場の中ではそこが一番賑わっている。

周りを見ると、「芸人募集中」という内容の看板が立ててあった。どうやらここで合っているようだ。

主催者らしい人に合いに行くことにする。宿に泊まったやその他の今までの出費がかさんで、大分財布のほうも怪しくなっていた。

あのピエロ軍団は午後少し過ぎまでやるから、そこから先は使っていること、そして夕方まではこの当たりは賑やかであることを聞いた。

「ところであんたはあいつらと違って何ができるんだい」

あご髭をさすりながら僕に対して訝しい視線を浴びせる。実際の僕の格好であるピエロのように客を楽しませるようなことはできないだろうと思われるも仕方がない。

「あなたは、こんな名前の楽団を知っていますか？」

僕は自分がもとに所属していた楽団の名前を言った。

「知ってるも何もかなりの有名どころじゃないか。昔一度ここにも来たことがあったな。あれは盛り上がった」

「僕はそこに所属していたアコーディオン弾きです。今は脱退してそこには所属していませんが。証拠もちゃんとあります」

「そうなのかい！ それはそれは……それなら全然構わんよ。俺たちを楽しませてくれるなら」

メンバーだけに配られる特別製のバッチと両親の使っていたアコーディオンを出そうとしたが、その一言で証明するようなものは必要ないことがわかった。豪快な人だった。

まあ、とにかく予定はとれたのでよしとしよう。

「ひとつ、よろしいでしょうか」

僕は言った

「なんだい？」

男は振り向いて答えた。

「僕の演奏は、決して人が楽しくなるようなものではないと思うのです。いえ、技量とかそういう種類の問題ではないのですが……」

これは断っておかなければならない。下手したら追い出されるかもしれない問題だからだ。

「いや、全然かまわんよ。好きなようにやっちまってくれ」

豪快に主催の男は笑った。

「この市場を見てみなよ。みんな飢えてるんだ。いつだって。喜びにだって、悲しみにだって。そのうえ満たされないのが人間だろう？俺たちや俺たちを満たしてくれる何かをいつだって探してるんだ。それがトマトだったり、あのピエロだったり、あんただったりする。単なる需要と供給だけがこの市場にあるんだ」

僕と主催者の男は、ピエロがナイフでお手玉をするのを一緒に眺めた。

三章 二節 双子には悪魔のささやきを

演奏が終わる。声を出すものは一人としていなかった。

先ほどのピエロ軍団のときは、一つ芸が終わるたび、溢れんばかりの歓声が沸いたものだが。

そのピエロ軍団も僕の演奏の聴衆に混じって僕の演奏を聞いているようだった。

僕が演奏する後には必ずこういった沈黙が残る。

この演奏がこの人たちの心のどこかに残り続けると信じて僕はアコーディオンを操っているのだが、果たして今回はうまくいったのだろうか。

どこからうめくような声が聞こえる。涙を我慢しているようだ。彼、あるいは彼女は果たして、この雰囲気にもまれて泣いているのだろうか。出来ることなら僕の演奏の真意が伝わったと思いたい。

演奏が終わったことを示すため、礼をする。

一つの拍手につられるようにその拍手は多く、音は大きくなっていく。

最後には隣の声も聞こえないような音の渦が出来上がった。

こういつとき、やってよかったという自然の感情が湧き上がる。
しかし、それが真の目的ではない。

静寂や悲哀の向こう側に僕を感じ取ったもの。それが伝わるのは
果たしてこのうちの何人だろうか。

あえてそれを聞くことはしない。僕が納得できるまで修練は続く
のだから。誰に聞いたってそれは仕方のないことだ。

そして、この思いこそが僕の旅の一番の目的でもある。

「いや、まさかここまでの腕なんて。君の事を少しばかり、甘く見
ていたよ」

主催の男が僕に近寄って話しかけてきた。

同時に硬貨の落ちる音がする。男が落としたものだ。

落とした先は僕のアコーディオンのケースの中だった。それは見
物料と見て間違いないようである。

そして、それを皮切りに次々と人が押し寄せてくる。

観客が皆それぞれに散った後には、ケースの中に納まりきらない
札束や硬貨と、後始末を終えた僕が残された。

これで次の大きな街までの生活費は稼げただろう。

主催者は僕の名前を聞いてから、「また是非ここでやってくれよ」
と言ってくれた。

どうやら演奏はあれで良かったらしい。

ピエロ軍団にも、後始末の最中に声をかけられた。

「君には驚かされたよ。僕たちはあのような方法でしか人を感動させる方法を知らないからね。それなのに君は、それよりずっと面倒なことを一人でしているんだから」

僕はその言葉に愛想笑いで返すしかなかった。

僕だって昔は彼らと同じ方法で人を喜ばせることが出来たんだ。出そうとしたその言葉は、僕の自制心と雑踏の中にかき消された。

昨日と同じ宿へと引き返す。何せ複雑な道なので慎重に道を選ぶ必要がある。情報屋と歩いた記憶を頼りに見覚えのある景色だけを進んでいく。

その僕の帰路阻むように、二つの小さな人影が姿を現す。

「あーでいおんっていうのをえんそうしてたのはあなたね？」

いきなり右の子が言った。

影の正体は、6歳から7歳あたりの、顔がそっくりの二人の女の

子だった。

双子と見てまず間違いないだろう。

物盗りにしては小さいし、やりかたがあからさま過ぎる。宗教の勧誘にも見えない。なんだろう。見当がつかなかった。

「じゃあ、しんぞうももってるのね？」

左の子が言った。やはり声もそっくりだった。

……………。

いや、そんなことはどうでもいい。なぜ心臓のことをこの子たちは知っているんだ。

「いや、知らないよ。心臓ってなんのことだい？」

シラを切ってみた。今はやり過ごせるに越したことはない。そしてその後でこの子たちと心臓の関係を知っていけばいい。

「でも、あこーでいおんをもってるひとはしんぞうをもってるっていつてたよ」

右の子が言った。

「誰がそんなこと言ってたんだい？」

「あくまさんがいつてた」

左の子が言った。悪魔？

「わたしたち、あこーでいおんがわからないからあくまさんにきいてみたの」

「そしたら、かなしいおとのするがつきをひくひとだっておしえてくれたの」

「いちばにいる、かなしいがつきをひくのはあなたなの」

双子は堰を切ったように僕のことを言い当て続けた。

「ちょっとまってくれ。悪魔って、あの、羊が黒くなったやつみたいな感じのが君たちのところに来たのかい？」

「ううん。ふつうのひと」

「じぶんはあくまだって、じぶんでいったの」

双子はぴったり息をあわせて一つの話を話していた。どうやら二人で一人分の内容を話せるらしい。

「君たちはその『あくま』のことを信じるのかい？」

「あくまさんは、おしえてくれたの」

「あなたがまちであこーでいおんをひくまえに」

「あこーでいおんをもってるひとが、しんぞうをもってるって」

「あくまさんは、おしえてくれたの」

双子の話を総合すると、どうやら僕のことを知っている人が、双子に対して心臓のことを教えたらしい。

でも僕が心臓を持つてゐることは、前の村の娘が、あの老人しかない。

しかし、娘がその犯人である可能性は限りなくゼロに近いように思えた。

「その『あくま』は深いフードみたいなものをかぶっていないなかったかい？」

「いいえ、わたしたちのきるようなふつうのふくだった」

「わたしたちのきるようなふくをきるあくまさんだった」

「なら、その人は年老いた男の人じゃなかったかい？」

「いいえ、わたしたちのおとうさんくらいの、ふつうのおとこのひとだった」

「わたしたちのおとうさんくらいの、ふつうのあくまさんだった」

そこであの老人の声の不自然なことを思い出す。それなら彼女たちの言う年齢でも僕ぐらい騙すことは可能かもしれない。

しかし、この双子を使って僕をどうしたいのかいまいち真意がつかめなかった。

「その男の人はどこへ行ったかわかるかい？」

「わかんない。どこかいっちゃった」

「どこへいっちゃったかわたしたち、しらないの」

「そうかい……」

僕が横を通り過ぎようとすると、彼女たちは僕の行く先を回り込んで、僕を止めようと両手を広げた。

僕はこの道しか帰り道を知らないから彼女たちをどうにかするし

かないのだが、できれば手荒な真似はしたくなかった。

そういえばまだ聞いていなかった。彼女たちがどうして僕の道を阻むのか。

「えっと、君たちは僕になにか用があつてそうしてるのかな？」

「しんぞうをもってるのはあなたね？」

右の子が言った。これ以上とぼけても何も変わりそうになかった。

「そうだけど、それがどうかしたのかな？」

「あなたがもってるしんぞうを、わたしたちにわたしなさい」

左の子が言った。

三章 三節 依然として少年には心臓を

人影のまばらな、狭くなっていく路地の途中。
夕日は少しずつその姿を消そうとしていた。

「だから、あなたのもってるしんぞうを」
「わたしたちに、わたしなさい」

……これは、良いことなのだろうか？
とにかく、僕には願ってもないことではあるのだが。

「ええと、君たちはその僕の持つてる心臓をもらってどうするつもりなのかな？」

「わたしかわたしのどちらかに」
「そのしんぞうをうめこみます」

「……………何だって？」

「あくまさんが、いったの」
「あくまさんはわたしたちがそっくりなのは、わたしたちのしんぞうがひとつしかないからだって」
「しんぞうがひとつしかないから、わたしたちはずっとふたつでひとつだって」

「わたしたちは、ひとつでひとつになりたいのです」

「しかし、しんぞうがひとつしかないのでふたつにはなれません」
「あくまさんが、いったの」

そんなことがあるわけがないじゃないか。
二人とも当然からだが二つあるのだから、心臓だって二つあるはずだ。

それがない、というのはどういうことなんだ？

なんにしろ、今この子たちに心臓を渡せばどうなるかもはや僕には想像がつかない。

彼女たちは「うめこむ」と言っていたが。

「君たちはどうやってその心臓を『うめこむ』つもりなんだい？」

「あくまさんはいいました」

「わたしたちのどちらかに『あな』があるので、そこにしんぞうをおけばよいそうです」

「なつ、まさか、君たち、自分の体を……その、切るか何かするつもりで……」

「あくまさんがいうことはまちがいありません」

「じつさい、あなたがくることをいいあてました」

「あなたがあこーでいおんをひくこともいいあてました」

「あなたがしんぞうをもつてくることもいいあてました」

「あくまさんのいうことに」

「まちがいはありません。」

今心臓を渡すわけにはいかない。これは絶対だ。

悲劇を忌避しようと謡う人間が悲劇それ自体を起こしてどうする。面倒な荷物ではあるが、今それを下ろすわけにはいかない。それだけはするべきではない。僕が、僕でなくなってしまう気がするから。

「君たちはなぜ自分の心臓がひとつしかないと言い切れるんだい？」

「あくまさんがいったからです」

「あくまさんのいうことはぜったいです」

「君たちは自分の心臓の音が聞こえないのかい？ 君自身の心臓がそこにあることが確かめられないのかい？」

「しんぞうとはどこにあるのですか？」

「わたしたちのしんぞうは、ひとつはあなたがもっているのではないのですか？」

……段々わかってきた気がした。なぜこの子たちが常軌を逸した行動をとるのか。

「君たちは心臓がどういうものかわかっているのかい？」

「いいえ。しかし」

「あなたからひとつもらえるとききました」

なるほど。

心臓そのものを知らない、そういうことだったか。

そういうことなら僕にも容易に説得できるかもしれない。

いや、容易でなくとも説得はしなければならぬが。

「なら、教えてあげよう。心臓はここにある」

僕は自分の手を自分の胸に当てた。

「それはからだというものです」

「しんぞうではありません」

「いや、ここは体の一部の心臓というところだよ。君たちが欲しが
つてゐる心臓はこちらのほうじゃないかな？」

荷物の中から袋入りの心臓を出し、中身を取り出す。

「そうです。そのようなかたちをしているとあくまさんはいつてま
した」

「あくまさんはやはりただしいのです」

「この心臓は常に動いている。脈を打っている。そうだね」

「そうです。あくまさんのいうとおりです」

「そのしんぞうが、わたしたちをふたつにしてくれるといっています
した」

「そうじゃないんだ。君たちにもちゃんと心臓はあるんだよ。ふた
りに、ふたつずつ」

「どういふことですか？」

「それはしんぞうではないのですか？」

「そういつことじゃない。さっきも言っただろう？心臓はここにあるって」

もう一度自分の胸を指さす。

「君たちもやってごらん」

「……なにもかんじません」

右の子が言った。

「服の上からだからじゃないかな。服の下から手を入れてやってごらん」

「……ちいさくしんどうをかんじます」

左の子が言った。

「じゃあ、今度はこの心臓をさわってごらん」

「わたしたちのよりずっとおおきいです」

「ですが、わたしたちのものとおなじです」

「だろう？心臓は君たちの中にはじめからそれぞれ、二つあったんだよ」

「ですが、あくまさんのいうことはただしいはずですよ」

右の子が言った。

「悪魔は人を不幸にする存在だ。それに本当のことだけを言うとは限らない」

「でしたら、私たちはひとつだけうそをつかれたのですか」

左の子が言った。

「そうさ。何より君たちの不幸を願ってね。……そうそう、僕の言うことが嘘だと思ったらお医者さんに心臓の位置を聞くと良い。それと、悪魔が何なのかもね。それに」

たとえ悪魔の仕業であっても、これだけは言っておかなければいけないと思った。

「死を覚悟してひとつの事実を確認するよりも、生きて、沢山の物事と触れ合うほうが素敵だと僕は思うのだけだね。大丈夫。二人ともそれぞれに違う、綺麗な人になれるよ」

双子は呆然と立ち尽くしていた。もう道を塞ぐことも、心臓をねだろうともしなかった。

「それじゃ、僕はもう行かなきゃ」

日はだいぶ傾いて、あちこちで明かりが灯り始めていた。

「待ってください」

左の子が言った。

「どうしたのかな？」

僕は答えた。

「あなたは天使です」

右の子が言った。

「……それはちょっと違うんじゃないかな」

「悪魔の反対は天使だと聞きました」

「悪魔さんはわたしたちを不幸にしようとしました」

「天使さんは私たちを幸せにしてくれました」

「天使さんにお伝えすることがあります」

伝えること？

僕は立ち止まってそれを聞くことにした。

「心臓は私たちのものではないと悪魔さんは言っていました」

「悪魔さんは、『心臓の真の持ち主はもっと東にいる』と言っていました」

東？　そこに心臓に関する何かがあるのだろうか。

悪魔の言うことにしろ、本当にその男が悪魔なわけではないだろうではないだろう。

何にしても、小さくはあるが手がかりが一つ、見つかったのだ。

「私たちは、人の心臓を取ろうとした悪い子です」

右の子が言った。

「これから気をつけていけばいいさ。生きていけば、それくらい、いくらでも変われる」

左の子は何も言わなかった。

そして最後に、二人は、

「さようなら。悲しいあーでいおんをひく天使さん」

と言った。

僕がそこを立ち去ろうとした後も、二人はお互いの心臓を確かめ合っていた。

四章 一節 即席の国

東に心臓の手がかりがある。双子は確かにそう言った。

しかしそれ以外に手がかりがないのでそれはないのと一緒に同じようにも思える。

心臓の詳細を知るためにもっと沢山の情報を手に入れる必要が僕にはあった。

そもそも、東というのがどの程度東なのか、この大陸の東なのかこの大陸の東なのか、僕にはさっぱりわからないのだ。

僕は世界地図というものを持つてはいないしそこまで範囲が広がったらお手上げだ。

僕はそんな、心臓のために世界を救ってやろうとか、そんなスケールの大きい人間ではない。それは繰り返している通りだ。

今やることで僕はいつだって精一杯なのだから。

僕の旅は二年を通して、大陸を小さく一回りしてきたところだった。僕に故郷などないが、それでも一時期身を寄せていた場所があった。そこが僕の出発点で、現在地はちょうどその近くに位置していた。

二度と戻るまいと思っていたのだが、情報の目処がそこについていたので、やむを得まいが、一度そこに帰ることにした。

この思いは結局、僕のわがままなのだ。

そこへ向かう途中、大きな城門を見つけた。一本しか道がないので、そこを通らなければ目的の場所へたどり着けない。

門番らしき兵士が二人、その城門の両脇に一人ずつ立っているのが見える。

地図を広げてみるが、このあたりにそのようなものがあるとは書いてない。最近できたものだろうか。

しかし、なんのために。

ここには元々、村も何もなかったはずだが。

「ここを通っても構わないのでしょうか？」

門番の一人に聞いてみた。

「いや、一応荷物を調べさせてもらう。危険なものがあったらここで預かる決まりになっている」

答えが返ってきた。

「全部調べるんですか？ 服の内側まで」

「いや、隠されている可能性のあるところまでだ。肌着までは調べはせんよ」

ナイフや拳銃が見つかると思の方へ持つて行かれた。

「この国を出るときに手続きをすれば返してやるから」

兵士は言った。国？

「ちょっと待つてください。この城門の先は別の国になっているんですか？」

「そうだ。いつからかは知らんがそういうことになったらいい」

地図では村の一つもなかった場所にいきなり国ができています。これはどうということなのだろう。

「この国はいつできたんですか？」

念のため聞いてみる。

「さあ。国がいつできたかなんて覚えてるやつなんているのか？」

一つ、不穏な可能性を感じた。

だが、それは僕が考える可能性ではない。僕は無事にここを抜けることを考えればいい。今のところは。

「これは何だ？」

兵士が荷物の中から袋入りの心臓を取り出す。

「心臓ですね」

「そんなことは見ればわかる。どうしてそんなものがこんなところにあるのかということだ」

「ちょっとした成り行きですね。なぜそうなってるかは僕が知りたいくらいです」

兵士は向こうにいる二人目の兵士に心臓を持って相談に行った。そりゃあんなものを見れば慎重になる。

兵士が戻ってくる。

「爆弾の類ではないよな？」

「だったらそんなに粗末にしません」

兵士は扱いに困っているようだった。

「何でしたら差し上げてもいいですよ。僕の入国記念にでもどうぞ」
「いるかこんなもん」

まあ当然の反応だった。もう残念だとか思わない。

「一応、科学部の連中に預けておく。無事が確認されれば出国時に

拳銃と一緒に戻ってくるだろう」

「それは残念ですね」

すべての荷物の検査が済んだようで、ようやくその門への通過、つまり『入国』が許されたのだった。

門の向こうにはちゃんと街があつて、石畳の道路と煉瓦の家が、他の地域となんら変わらず立っていた。

僕がこの地図を買ったのは、旅に出てからすぐのことだったから、二年と少し前ということになる。

地図が作られたのがもう少し昔だから、そこにある情報はある程度古く見積もって三年ほど前のものだ。

その三年前の地図は、この場所には何もなかったことを示している。実際門の両脇や城壁のすぐそばには植物が茂っていて、この場所にいきなり箱庭のように街が落ちてきた、という印象だった。

街を回ってみる。宿や食料の店といった僕に直接関係のある場所以外にも、酒屋や修理屋、服屋なども建っていて、中々充実した街並みだった。

子供が走っている。親がその後を追う。カップルらしき二人が何か立ち話をしている。

見る限り不思議な仕草はどこにもない。

国は小さいようで、何分か歩くとすぐに城壁にぶつかった。

変わったところと言えばそれくらいだろう。それでもこの街と人口は二年三年で作り上げられるものではない。

一通り歩いては見たが、不自然な感じは見受けられない。歩けば歩くほどその辺りの違和感は強くなっていった。

違和感は拭えない。今日中にこの国は出て行ってしまう。そう思った。

食料を確保しようと店に入ろうとしたとき、後ろから声をかけられた。

さっきとは違う兵士が僕のそばに立っていた。

四章 二節 ロックドハート

連れて行かれた先は、これまた時間をかけて作られたと思われる城の中だった。

兵士は連れて行く途中で、心臓のことで「王様直々におっしゃりたいことがあるそうだ」と僕に教えてくれた。

豪華なエントランスを越えて謁見の間へと連れて行かれる。兵士の数は二人に増えていた。

別に僕は逃げ出したりしない。今逃げられる状況ではないことはわかっている。武器を取り上げられた上に、もう城に入ってしまったのだから。

外ならまだ逃げられただろうが、心臓のことを話されたとき、また心臓の手がかりをひとつ得ることができないかと考えたのだ。結局僕は心臓の方を選んだと言うことになる。

しかし、最悪の可能性も考えないわけにはいかなかった。

もしあの心臓が兵士の言うような爆弾のようなものだったら、僕は間違いなく牢へぶち込まれるだろう。

正体もわからない分どんな可能性だってあり得るのだ。
最悪、殺されることだって。

しかし逃げたからと言って逃げ切れる場所でもない。周りは城壁に囲まれているし、国は狭い上に僕はここの地形には明るくない。

素直に捕まった方がこの場合は得策ではないだろうか。

僕は天、あるいは心臓の正体に自分の運命を託すことになった。

王座に座った、煌びやかに着飾った老齢の男が座っている。おそらくこの王様で間違いないだろう。

「お前がこの心臓を持っていたという旅人か」

「そうです」

下手なことは言いたくないので口数は少なくした方がいいだろう。

「実に興味深い。この心臓はどこで手に入れたのだ？」

「旅の途中で行商人のような男にむりやり渡されたのです」

僕の両隣にいる兵士、王様の護衛、きさき、大臣、そのほかの人も特に変わったところはない。

僕が持つてる地図の方がおかしかったのだろうかとそのときには思い始めていた。

「ほほう。……お前はこの心臓の正体について何か知っているか？」

「何も知りません。知らなくて困っているくらいです」

「そうか。ならば、悪夢の契約については知っているか」

「……………思い出したくありません」

悪夢の契約。

その言葉が出てくるとは思わなかった。それは、その契約でできたものだというのか？

「興味深いではないか。一体これをつくるのに幾つの人命を費やしたのだろうか！」

王様の言葉に大臣はじめ誰一人反応しなかった。普段からこういう人間性をしているのだろうか。

「まあよい。わしが興味深いと言ったのはその心臓そのものではない。心臓を取り出すくらいなら数える程度でできるからの。問題は、さらにいくつかの呪いを施しているという点にあるのだ」

科学者らしき人物が心臓を持つてくる。心臓は籠に入れたれた状態で僕らの前に現れた。

「やれ」

王様が言うと、兵士は腰に当てていた剣を抜いて、心臓入りの籠に突き刺した。

「なっ……………」

思わず声が出る。なんてことするんだと叫ぶのは留まった。この国王、何をするかしたわけではない。

兵士が剣を引き抜く。しかし血の一滴もついていない。籠に入った心臓も無事だった。

「こういうことだ。この心臓はどんな攻撃も無効化する。どんな仕組みかは知らんがな、そして」

王様は籠の方を見てから外に首を振る。開ける、という合図なのだろう、科学者が鍵を外して心臓の入った籠を開けた。

心臓はあの最初の道で起きたことのように、浮遊して僕のところへ戻ってきた。

「このように、自らが自由になるともっとも敵意の無いものの元、あるいは持ち主の元へ帰って行くのだ。これもどのような『契約』によって得られたのか……まったく大したものではないか」

王様は自分の考えに浸っている。

「あの、僕を呼ぶことに意味はあるのでしょうか」

さっきから心臓のことばかりで本題に入ろうとしない。僕を呼んだのはそれを伝えるためだけではないはずだ。

「そうだ。どうもわしが心臓を手にとると心臓が逃げてしまうものでな。兵士に持たせても同様に逃げてしまう。仕方ないから籠に入れてあったが、どうしてかお前なら大丈夫なようじゃの」

「そのようですが、それが王様と何の関係があるのでしょうか」

髭をさすりながら、王様は嬉しそうに言った。

「ちょっとした思いつきじゃ。この心臓を今度の演説に使おうと思つての。お前は知っておつたが、悪夢の契約

は一般には知られていない呪術じゃ。神を討ち取った証と紹介した後この心臓を取りだしてみたらおもしろいのではないかと思つてな」

「それじゃ、あなたがたに差し上げますよ。好きなように使つていただいて構いません」

さっきの兵士がしたように突き刺してもどうにもならないなら、大抵のことは王様の言うように回避できるだろう。僕が心配せずとも心臓には自分で生きる力を備えているということになる。

「いや、お前の力が必要なのだ」

王様は僕の方をじつと見る。濁った目だった。

「……どういふことですか」

「さっきも言ったが、わしらがこの心臓を扱うとき、心臓を籠に入れねば逃げ出してしまうのだ。わしが心臓の使い方方を城の皆に伝えた途端のことじゃ。籠に入ったまま『神を討ち取った』では格好がつかないであろう。素手で持ち上げることのできる人間が必要なんじゃない」

「その役割が、僕ということですか」

「そういうことじゃ。一度、それを示すことができたなら、あとはガラス棚にでも飾っておけばよい。だがしかし、最初の一回。それだけはこの儀式が必要なのじゃ。民衆の心を掴むためにはな」

王様は兵士の方を見てから、僕の方を指さした。

「すまんが一泊、わしの城の牢屋で眠ってもらう。逃げ出されたらたまらんな」

両脇の兵士に両腕を掴まれる。

果たしてこれは正しい展開なのだろうか？

四章 三節 骨組み、皮の装飾、血の塗装

冷たい牢の中で考えたのは、悪夢の契約のことについてだった。あれは伝説ではなく、現実に影響する呪術なのだろうか？ この国王はそれを当然のことのように話していたが。

『一体これをつくるのに幾つの人命を費やしたのだろうか！』

その言葉を思い出すたびに頭が痛くなった。

もし、本当に国王の言うとおりだとしたら、この国はまさか……いや、まさか、そこまですることなどあり得ないだろう。

鉄格子の隙間から半分に割れた月が浮かんでいるのが見えた。これから僕はあの王様にどう扱われていくのだろう。

僕は悪夢の契約のことを知っている。国王は民衆がそれを知らないのを利用して権威を高めようとしている。

僕が牢から放たれた後、腹いせに契約のことを触れ回って歩く可能性だって当然考えるだろう。

要するに僕はこの国にとって都合の悪い存在なのだ。

だから、どうする？

できれば、すぐに城から出してもらえれば一番いい。心臓ともここでお別れできるし良いことづくめかもしれない。

そしてその楽観的観測の反対として、僕が殺されるという可能性が考えられる。あの国王からすればそっちの方がよっぽど自然な気がした。

なにせ街で僕を知ってる人はいない。例えこの世から消えたところで困る人間はこの国にはいないのだ。不思議がる人がいるかもしれないが、調べるところまで行くかは相当怪しいものである。

……どうしても、両親が死んだ日のことを思い出す。あの事件も悪夢の契約が絡んでいた。

……………。

幼かった頃の話だ。一〇年以上前の話になる。

僕はそのころも同じように旅をしていた。ただしその頃は、両親

と、その他にもいろんな人たちが一緒にいた。
僕たちは音楽で人を喜ばせる旅をしていた。今とは正反対だ。

そのころ僕は見習いで、ショーをするときはいつも裏方だった。
僕も早く表に出たい。その一心からいつも楽器を練習していた。

ショーに出させてもらえると決まったその日、舞台裏で高鳴る心臓を必死で押さえながら僕は出番を待っていた。他のメンバーがいつものように楽器を調整していた。ショーは今にも始まるうとしていた。

その時だった。舞台裏にいきなりナイフを持った男が現れて僕に向かって襲ってきた。

男は何かを唱えながら僕に向かってナイフを向けた。おそらく僕が子供だったから仕留めやすいと思ったのだろう。

確かそのとき僕は、悲鳴を上げながら両腕で体を守った。目はしっかりと瞑っていた。

肉に突き刺さる鈍い音がする。しかし痛みはどこにもない。

「クソが！」と大声が聞こえる。

今度はヒュン、という鋭い空を切る音の後、「ぐっ」というぐぐもった声が聞こえた。

自分の父親の声だということに気づいた。
目を開けると同時に、銃声が響き渡った。

僕の目の前に広がったのは、血を流して倒れているナイフの男と、
同じように血にまみれた両親の姿だった。

僕の初めての出番は、両親に見てもらうこともなく、永遠にその
機会を失ってしまった。

なぜなら、僕の楽器の音色がそのときから全く変わってしまった
のだ。

原因は言うまでもない。

僕の演奏は、他のメンバーとは明らかに調子が合わなかった。楽
団としての僕の役割は、これまでのように、裏方で準備をすること
だけだった。

「君もここにはもう、居たくはないだろう」

リーダー格の男が僕に言った。実際のところそう思っていたし、
僕はうなずくしかなかった。

裏方として一生を過ごす未来に希望など持てるはずもなかったの
だ。

後から聞いた話によれば、男が唱えていた言葉は、悪夢の契約に

必要な呪文の類であつたらしい。

そしてそれが、僕が悪夢の契約を知ったきっかけとなつたのだ。

心臓は、その悪魔の契約に直接僕が関わる二回目の事物となる可能性がある。

……………。

遠くで物音がする。かなり危険な感じだ。
たまに悲鳴や金属音が混じっている。おそらく剣を振り回す音だろう。

何か普通でないことが起きたことは間違いなかった。

足音がどんどんこちらへ近づいてくる。
そして、僕のいる牢獄の扉が開かれた。

四章 四節 リターンマジック

面をつけた兵士が入ってくる。素顔は見えない。
入ってきたのは一人だけで、他にこちらへ向かう足音は聞こえない。

「何があつたんですか」

当然これは聞かなければならないことだった。下手したら今こゝで僕の命が終わる。

「反乱だよ。臣下が王を殺したんだ。俺は君を助けるように言いつかつてきたのさ」

そこで僕は気づいた。

そういえば僕以外に囚人の姿が見あたらない。

最初からあつた違和感はここでもまた不安の芽を出した。

兵士は錠を持って僕の牢の方へ歩いてくる。

「ああそつだ。聞きたいことがあるんだ」

思いついたように兵士は立ち止まった。

「いや、後で答えますから早く外してください」

「まあまあ、ちょっとした余興だよ」

「マイペースな兵士だった。」

「ちょっとした質問があるんだが、できるだけ真剣に答えてくれな
いかな。場合によってはこのまま僕が帰るということもあるからち
ゃんと答えてね」

兵士は向かいの壁に寄っかかった。

そう言われてしまったら答えないわけにはいかない。開けてくれ
ないなら急ぐも何もあつたものではないからだ。

というかまずそんな余裕あるのか。

まあいい。今は何よりもまず、質問に答える頭の体制を整える必
要がある。

「君は悪人が弱者を思いのままにしているのを見てて、放っておけ
る人間かい？」

兵士は言った。

「さあ、場合によります」

僕はそれに答える。

「その子を助けるには、悪人を殺すしかない。それならどうする？」

「殺すでしょうね。そしてその上で二人が生き延びる道を探します」

兵士の兜の方向は質問の間ずっと僕に向けられていた。

「そうかい。……うん、もういい。質問は終わりだよ」

兵士が近づいてくる。鍵を差し込んで牢が開かれる。

「ここからは俺が案内するよ。秘密の抜け道があるんだ」

言われるままに兵士の後をついて行く。

階段を次々に下りていき、道はだんだん暗くなっていく。
目が慣れるまで兵士を追うことで精一杯だった。

「こつちだ」

ある程度進んでいくと、兵士が梯子を登り始めた。
素直に僕もそれに従う。

上の方で、ガコン、と何かの外れる音がする。

梯子を登り終わると街の真ん中あたりに出てきた。登り終えた僕の
手を引っ張って出した後、再びその穴に入り始めた。

「じゃ、頑張つてね。できるだけ急いで城門を出た方が、僕として

はやりやすいかな」

言ってることの意味はよくわからなかったが、とにかく急いで出た方が良さそうだった。

城門を抜ける。乱れた息を整える。一度だけ振り返ろうとして後ろを見て、もう一度確かめる。

今僕の見る限りでは、城なんてどこにも見あたらなかったのだ。

月夜は、森林以外の何も照らしてはいなかった。

城も城門も街も一つ残らず、ごっそりとそこから消えてしまっていた。

記憶を頼りに城門のあった辺りを調べてみると、僕のものと思われる拳銃とナイフが、無造作に道の上落ちていた。

心臓は僕の近くで浮いていた。いつの間に戻ってきたのだ。

五章 一節 夢の種

見たことのある一軒の建物。何の変哲もない普通の家。

僕が楽団を抜けてから、一時期身を寄せていた家が近づいてきていた。

その家に近づいていくたびに気分が沈んでいく。

相談尽くとはいえ、一度はこの家を見限ったのだ。今更合わせる顔がどこにあるだろうか。

しかし、心臓に関する手がかりを得られるのはここくらいしか思いつかなかったのだ。

重い気分を引きずったまま、それでもドアをノックする。立ち止まっても何も始まらないのはずいぶん昔に学んだことだ。

ドアが開かれる。見知った老人が姿を現す。

決して、気分のいい再会では無い。あっちだってそう思ってるはずだ。

そもそも、老人は僕のことを覚えているだろうか。

できることなら、忘れてしまっていた方が気が楽なのだが。

しかし、老人は僕の顔を見た途端、「帰ってきてくれたか……」
と言っただ。

とても嬉しそうな顔で。

どう反応すればいいのだろう、こういうとき。

「すみません。できればもう会うこともないと思って旅に出たのですが」

あらかじめ用意していた台詞を言う。しかし、明らかに使う言葉を間違えている。

「何を言っておる。お前が生きることだけが唯一の心配だったのに。さあ、あがっていきなさい」

暖かい言葉。あれだけ僕が恩知らずなことをしたにも関わらず、そんなことは気にも留めないような、寛容な態度。どうしてこの人はこんなにも優しいのだろう。

元々楽団の団長の住んでいた家で、文献などを管理する家系だった。

団長は破天荒な男だったらしくその仕事に徹底的に抵抗して、最終的に楽団まで作り上げて家に抵抗した。

僕にそこに住むように提案したのも団長だった。今にしてみれば妙な下心が透けて見える。結果的に僕はそれすらも裏切ってしまったわけだが。

預けられた僕はここの家の後継者になる予定だったのだが、血がそうさせるのか自分を過信したのか、再び旅路への願望がそこで芽生えてしまった。

団長から渡された、もう持ち主のいない、両親の名前入りのアコ
ーデオン。

老人の家に身を寄せていた頃はそればかり奏でて、旅へのあこが
れを募らせていった。

そしてある晩に、僕は老人——団長の父親なのだが——に旅に出
ることを告げた。

老人は真剣に僕を説得した。それにも関わらず僕は、自分の我が
儘で、ただ世の中に伝えることがあるなどのたまつて下がらなか
った。

折れたのは老人の方だった。

老人は旅に出ることの心得や、旅に関するいろんな知識を僕に与
えてくれた。僕が今生きているのはその老人からの知恵が大半を占
めている。最初の頃はそれで大変に助けられた。

それが二年と少し前のこと。

老人は二人分のお茶を持ってきた。

「昔に比べてずいぶんたくましくなったの。二年の旅はどうだった
？」

僕は二年にあつたいろいろなことを老人に話した。そのなかで、
老人が僕にした助言がどれほど役に立ったかも忘れずに伝えた。

老人は終始嬉しそうな表情で、「そんなことも言ったかの」と言
ったりして僕の話の聞いていた。

でも僕はわかっている。基本的に自分の言ったことを忘れるような人ではないのだ。それはこの家に住んでいた数年間の間老人を見てきてわかっていることだ。

旅のことは一つ残らず話すつもりだった。それが老人に対する唯一の贖罪だと思っていた。この老人を一人置いて、団長と同じことを僕もしたのだから。

これで償いになるかと聞かれたらそれはとても怪しいものになるのだが、それでも、僕にできることはそれくらいしかなかった。

話は心臓のところまでたどり着いた。

僕は袋の中から心臓を取り出す。

「どうやらこれが契約でできた心臓らしいんだ」

「……少し、見せてくれんか」

老人が心臓を見定めている間に、一晩で消えた国の話をした。

「あの国王は悪夢の契約が幾重にも張られていると言ってたけど」

老人は納得のいかない表情で、僕に心臓を返した。

「確かに普通ではありえん構造をしておる。生まれてこの方こんなものは見たことがない」

「そもそも、どうして国王はその契約であることを見抜いたんだろう」

「それは簡単じゃ。お前の言う国王が悪夢の契約について深く知っておったからじゃろ」

「どうということだい？」

「お前はまず、悪夢の契約それ自体についてどこまで知っておる？」

「人を殺すことで力が手に入る呪術であること、願望の大きさによって殺す人間の人数が変わっていくこと、そして、この世に現存する唯一の魔法であること」

「よろしい。そこまで知っていれば大丈夫じゃろう」

老人は口元に手を当ててうつむいた。この人はものを考えるときいつもこの仕草をする。

「城が消えたことについては、悪夢の契約で簡単に説明がつく」

「あの城が消えたこともその契約のせいなの？」

少し自分で考えてみる。

自信のない答えが出てきたが一応口に出してみる。

「反乱を起こした人たちが国を消したということ？」

「それは無いじゃろう。一つの契約を複数の人間の間で交わすことはできん。それに、国を消すことは数人数十人では利かん。これはわしの推測だが……」

姿勢はそのまま、視線だけが僕に向けられる。

「国王が悪夢の契約に詳しいのは、自分が契約をしておったからであらう。奴が何をおこなったか。それは消えた国のことを考えればわかる」

僕はそこでようやく思い至る。

「契約で国を作ったっていうのか！」

五章 二節 ハートゲッター

「無論、半端な数ではない人々の犠牲の下作られた国だったのだから。そして」

老人は自分のお茶を一口すすった。

「お前は知らなかったのだろうが、悪夢の契約は、本人が指定した期間を除けば、原則的に本人の死と同時に解除される。国王が死んで全ては消えたのだ」

「でも、国ごと消えたなら僕も一緒に消えるはずだ。確か兵士はもう王様は死んだといったようなことを言っていたけど」

「そこまではわしにもわからん。何かしらのタイムラグがあったのか、兵士が勘違いしたのかのどちらかじゃろう。……わしにわからんのは、兵士がなぜお前を外に出したのか。それと、国王がなぜ殺されたかじゃ」

「反乱くらいいくらでも起きるんじゃないのかな。それに、兵士の方だって僕を助けるくらい自由意志があったっていい」

「そうじゃろうか。契約の時、少なくとも臣下にそういうことは起こさないように準備するくらいの用心はしてもよいが……それに、基本的に契約者が作った人間の操作は契約者に委ねられる。ある程度自然な動きはしようとも、原則的な命令が国民には基本としてかけられておるのじゃ」

「ちよつと待ってくれ。それじゃ話が通らないじゃないか。僕以外

に旅人がいないとは言えないけど、反乱するはずのない人たちが反乱を起こして、助けるとい意志のない人が僕を助けている」

「お前を助けた兵士。そいつが何かしたことは確かじゃ。外にもう一人、国を消す役割を持つ人間が待機していたなら話は違ってくるが」

「僕が外に出ても誰もいなかった。まあ、すぐにその場を立ち去れば僕に見つかることもないだろうけど」

そうなれば、最初の馬車の件もその契約を使えば納得がいきそうだった。

あの老人は心臓を渡すためだけに作られたのだ。

「ところでお前、これからどうする？」

空になったカップを置いて老人はまっすぐこちらを見る。

「お前を助ける理由は一つしか思いつかん。心臓をお前が運ぶことをそいつは願っているのだ。お前に何を託したかはわしに知るよしもないが、とにかく」

ひととき鋭い視線が僕をとらえる。旅立ちの日もたしか老人はこんな目をしていた。

「お前は行くのか？ どこかも知らぬ心臓の持ち主のところへ」

目の力は以前と変わらず衰えた感じはしない。人を押さえつける

ための目だ。

「その心臓を抱えてお前はどこまでいくつもりじゃ？ 理由もわからず意味のわからないものをもって、お前はどこへ行くつもりじゃ？」

「わからない。でもこの心臓のせいで、騒ぎに巻き込まれたし、その結果助け出されたことも事実だ。そこでこの心臓を他人に渡したら、僕は旅を続ける限り必ずその心臓を思い出すだろう。隠された真実への疑問を残しながら」

老人の目を真っ直ぐに見る。

「楽団のときと同じだ。そこに僕がいる限りその事実が残る。旅に對して僕は心に残るような失敗をしたくはないんだ。そんなことをしたら、もう僕に居場所は無くなってしまふ」

「この家に帰ればよからう。ここには書物以外の何も無い」

「僕がここに来たのは、僕の意志でなく、両親のことからの自然な流れから来ている。ここには残ってるんだ。あの日の残り香が」

「……………そうか。ならば、仕方あるまい。いつも、お前は自分の決断は変えなかったな。わかっておった。今回も、お前は行くだろうと、わしはわかっておったよ」

構えを解いた老人が背もたれに体を預ける。

「そのお嬢ちゃんたちは東、と言ったのじゃな？」

「確かにそう言った」

「地図を出してくれ。わしに心当たりがある」

言われたとおりにたたまれた地図を机に広げる。

「わしが住んでいるこの家の近くのこの村。この東には、地図には書いてないが、昔寺院があつてな。どういうわけか、そこから更に東の村。その村に通じる一本の道を通るものは今、一人もおらんのだ。どうしてかわかるか？」

「道が悪いのか新しい道ができたかのどっちかじゃないかな？」

「違うんじゃないよ」

老人は目を閉じて俯いた。僅かばかりの静寂。

「この道を通る者が一人も帰ってこなくなったのじゃ。数十年前から、突然に。今、この道を通る者はおらん。通るのは、この話を知らぬ者、あるいは知って何かがあるに違いないと踏んで向かつていった者。結局、例外は無く、一人残らず消えてしまっておったが」

「消えてるんじゃない、それは」

「おそらく、契約の材料にされとるのじゃろう。話を聞く限り、とんでもない数の人間の命をその心臓の契約者は奪つておる。その拠点の一つとして見てまず間違いないじゃろう」

「そんな場所があったのかい」

「しかし、そこにお前の望むものは無いかもしれんぞ。東という漠然なヒントだけで、誤った解答を求め死んでいくほど馬鹿らしいこともあるまい」

僕にはわかっていた。どうして老人がここまで手がかりを出してくれるのか。

「ここにしか、ないんだろっ？」

「……何のことじゃ？」

「悪魔の契約の気配のある情報が、そこにしかないんだろっ？　そうでなきゃ、あなたは僕にこんな場所を教えたりはしない」

そうだ。少なくとも老人は僕の身を案じてくれている。

「仕方のないことじゃった。お前が旅を続けるうちに、お前はその存在に気づいてしまうだろう。わしは、お前に無駄な歩みを取らせたくはない。だが、今なら、お前を引き留められた。もう、全て無駄になってしまったがな」

老人は机に肘をつき、手を組んで俯いていた。先ほど向けられた鋭い視線を持つ人間とは同じだと思えなかった。

この人のこの姿を見ると、ここにいないかならないと思ってしまうこともある。でも、今は。

「僕はそこへ行かなければ、これ以上心臓に近づけない。そんな気がするんだ」

「なぜ、そこまでお前は見知らぬ物に命を張ろうとする」

「僕は、与えられ、導かれ、助けられた。そして道は示されている。僕にしか与えられなかった仕事が今ここにあるんだ。誰かが自分の人生と沢山の命をかけて作り上げたその何かに、僕は選ばれてしまったんだ。何にしろ。ここで行かなかったら、僕が僕でなくなってしまう。そんな気がするんだ」

「その何かを作り上げた人間は、とんでもない殺人鬼だったとしても、それでもお前は行こうと言っのか？」

「ちょっとした質問があったんだ。少し前に。あのとき、何にしろ、僕は人殺しを肯定した。人を殺せる人間が殺されても、それは仕方のないことだろう？」

地図をたたんで荷物をまとめる。

「それじゃあ、僕はもう行くよ」

「そうか。……何があっても、帰って来ておくれ」

扉を閉める。道は開かれた。

六章 おはよう、おやすみなさい

目的の地へ向けて草の上を歩く。

誰も通らないので土の道路だっただろうその道は草が生えて道案内としての機能を失いつつあった。地図と磁石が無ければ今頃迷ってしまっているはずだ。

僕が死んで悲しむ人。それを考えながら歩いていた。あの老人は賢明な人なので、僕が戻ってこなかったことを悟っても取り乱したりはしない。

そして、その他には誰も思いつかなかった。僕を思いやる人間はみんな僕が過去に置いてきてしまったのだ。

もし、なんの躊躇もなく僕がここで命が失われたとしても、それによる損失はごく僅かであるように思えた。

自分の旅は途中だが、その目的が絶対世界に必要なだというわけでもない。

結局、僕をそこへ向かわせるのは勇氣や義務感ではなく、妥協や自惚れからだったのかもしれない。汚い感情だ。

それでももう、僕にはどちらでもかまわなかった。死んだらこの考えも打ち切られる。あらゆるものがシャットアウトだ。心臓を巡る冒険も、城の謎も、老人との約束も、全て。

目的の地である古い寺院が目に入る。

どういわけかは知らないが、その寺院の周辺はある程度手入れされていた。道無き道に土が姿を見せている。

どうやら周りの草は刈り取られたようた。しかし、寺院そのものには時代の流れがそのまま残っていて、何の手も加えられていないようだ。

崩れた寺院の一部に、一世代前の神官の格好をした男が座っていた。

その男は僕と同じかももう少し上くらいの若い男だった。

「どうしたんですか。こんな日く付きのところへ」

神官は言った。そこに不自然な感情は見受けられなかった。それに、ここがそれらしい場所であることもちゃんとわかっているようだった。

「ちょっとした用事があつて、それを確かめに来たんです。……この手入れはあなたが？」

「ええ。一人だと大変ですよ。何せ何もないところだから木も草も生え放題で」

神官は微笑んだ。

僕はそこで彼の声に聞き覚えがあることに気づいた。

「あなたはどうしてこんな使われないうな場所を手入れするんで

すか？」

「あはは、ただの酔狂ですよ。ただ、『彼女』が目覚めたとき最初に見る景色が、一寸の先も見えない草木の中だったら、きっと気分が悪いと思うんです」

彼女？ 一体誰のことを言ってるのだろう。

「ここは、昔私が働いていたところなんです」

男は急に話題を変えてきた。彼女についてはその流れの中で話すつもりなのだろうか。

「ひどいところでした。神がどうですとか、禁欲すべしとか言うくせに、自分たちは不当に金を受け取ったり、施された金を酒や売春に使うようなひどい人たちがいました」

男は風化した寺院の方を見続けた。

「子供たちを遊びの道具にしたり、果ては慰み者にしたり……暴力も日常的に行われていました。寺院の権威は落ちるところまで落ちていました。寺院の者たち以外はみなわかっていたのです。もうすぐ、こんな信仰は捨てられていくだろうと」

男の姿勢は変わらない。ただ、少しだけ震えているようにも見えた。

「しかし、それを、つまり寺院の崩壊を待っているだけでは、今の子供たちは決して救われない。私はそれを黙ってみているわけにはいかなかった。我慢できなかった。だから」

「守ったのですか。自分の手を汚してまで」

「私が守るべきだったのは、もつとも酷い扱いを受けていた一人だけでした。他の子供たちは寺院さえ無くなれば自分たちの力で生きていけると私は判断しました」

「では、『彼女』とは」

「寺院に入って真っ直ぐ行った突き当たりを左に行けば、地下室への扉があります。あとは一本道なので説明せずともよいでしょう。カギのようなものが必要になりますが、それはあなたが持っていると思います」

神官は僕の方を向いた。ここに来たことは正しかったのだ。

「一つ、確かめたいことがあります」

僕は言った。

「为什么呢」

神官が返事を返した。

「あなたでは、その彼女をどうにかできなかったのですか？」

「思いの外、時間が経ちすぎました。この世界に存在する魔法は、基本的に寿命を延ばせないように仕組まれているようです。……それに、あなたのような人たちも何人が来ましたが、それでは彼女を救えないと判断しました。どうやら、私にとってのラストチャンス

が今のようです」

「……あのとき、あなたの質問された意味が今、ようやく理解できました」

男の横を通り過ぎる。

「行つてきます」

若い神官の声は、城で僕が捕まつたときに助けた兵士のものと同じだった。

寂れた寺院の中に入る。今にも全て崩れ落ちてしまいそうな様相を呈していた。椅子は欠け、壁ははがれ、女神の像は無くなっていた。

突き当たりを左へ。蜘蛛の巣があちこちに作られていた。

本当に中は何の手入れもしていなかった。

向かう先にあるドアは一つだけで、特に迷うようなことはなにもない。古びたドアを引くと、軋む音とともに下へ向かう階段が現れた。

壁には口ウソクが一定の間隔をもつて取り付けられていて、それが行く先を照らしていた。あの神官があらかじめやっておいたのだろうか。それとも契約でずっと灯るようにしておいたのか。

しばらく降りていくとまたドアが現れた。開いて先へ進む。

どの程度降りたのか確かめるために振り返ってみると、最初のドアは暗闇に隠れて見えなくなってしまっていた。

階段を下り終えて今度は廊下を歩く。

果たして、この地下ははじめからここに作られた場所なのだろうか。それとも『誰か』が契約の元作り出したものだろうか。

ロウソクが、石壁の廊下を照らしている。所々落とされている首輪や鉄球などを見ると、どうやらこれらは神官の言っていた遊び道具だったのだろう。ならば、そのためにこの地下も作られたのだろうか。ならば、最初から決まって設計されていたのだ。たぶん。

廊下にはいくつも部屋があるようで、扉がいくつもあったが、それらは例外なく破壊され、開くようなものは一つもありそうになかった。

どんどん前に。一本の道だけを。誤れば、この破壊された扉のよう閉ざされたかもしれない道。それはもう二度と現れないと先ほど宣告された。一度も間違うことなく、僕はここまで来たのだ。

行くんだ。扉はおそらく最後の一つ。『一本道』の果てにある扉。そして、僕はそこにようやく向かい合った。

扉は開かない。カギはまだ解除されてはいないようだ。

袋から心臓を取り出す。心臓は僕の手を離れて扉に吸い込まれていった。

扉の隙間から光が漏れる。取っ手を引く。扉はすでに開いている。

ドアを開ける。

木の寝台に寝かされた少女を僕は見つけた。

心臓は彼女の胸の上に浮いている。そして徐々に彼女の体に吸い込まれていった。

少女が目を開ける。目は怯えていた。

「今日は、どんなお仕置きなの？」

廊下に置いてある器具の数々。あれは本当に使っていたようだ。

「もう、君を傷つけるような人は誰もいない」

「え？ …… そういえば、ここはどこなの？」

彼女は体を起こし、辺りを見渡す。

無理もない。数十年眠りの中をさまよったのだから、景色が変わっていようと別に不思議はない。

「ここは、もうどこでもなくなった場所だ。君はここから出て、名

前のある場所へ行かなければならない」

「そういえば、あなたは誰？ 神官の人たちじゃないわ」

少女の目は僕をとらえたまま固まっていた。自分の状況が飲み込めていないのだろう。

「君は、眠らされていたんだ。長い間。神官はその間にみんないなかった。君をいじめるような人たちはもうどこにもいない。……さあ、立てるかいい？」

少女は寝台から降りた。見たところどこにも支障は見あたらない。

少女は聞いた。

「私、これからどこへ連れて行かれるの？」

僕は答えた。

「君はどこへも連れては行かない。ただ君がどこかへ行くだけだ。僕は少しの間君の手伝いをしにきただけだ」

「よく、わからない」

「そのうちわかる」

寺院の出口に向かって歩く。彼女はその変わりようにいちいち驚いていた。自分の状況が少しずつ飲み込めてきたようだ。

「あなたの言ってた通り、私、本当に何十年も寝ていたの？」

「そうなるね。どこかのお節介な人が君を守ろうとしたんだろう。

……君はその誰かに感謝するかい？」

「ええ、もちろん。あんな苦しい毎日が終わったなんて、まだ信じられないくらいよ。その誰かっていうのは一体誰なの？ お礼を言いたいのに」

寺院を出る。

「その人はね——」

彼女が急に体の向きを変える。

「あの人、私知ってる！」

僕もその方向へ振り向いた。

しかし、そこには人の姿はなかった。

「——もう、どこにもいないんだ」

エピソード 語りたかったひとつのこと

「あなたはどうするの？」

老人の家で放たれた少女の言葉だ。

あれから僕たちは無事に老人の家に戻ってきた。

老人はいつも通りの笑顔で僕を迎えた後、隣にいる少女のを見て驚いていた。

「この少女一人のためにあんな呪いをかけていたのか」

少女には当然帰る場所がなかった。

老人には与えたい役割があった。

話はすんなりと進んでいった。

少女はこの老人の住む書庫を継ぐことになった。

「まるでこっちの方が夢みたい」

少女が言った。

「そうだね。夢みたいな現実はさぞかし綺麗だろうね」

僕は下ろしていた荷物を再び持ち上げる。

少女はそんな僕を見上げて言ったのだ。

「あなたはこれからどうするの？」

僕は答える。

「僕は旅を続けるよ」

「一緒にいてくれないの？」

「続けたいんだ。僕に与えられた出来事は終わってしまったみたいだけど、僕には僕のやりたいことがあったんだ、それを、僕にしか出来ないと言曲させて考えてた。ようやくそれに思い至ったよ。僕は心臓がなんなのか確かめたかった。理屈なんていらなかった。そして僕はこれからも旅をしたいんだ」

「じゃあ、もうお別れなの？」

さびしそうに少女は言った。老人の威厳のある目と威力は同じくらいだろうか。

「さあ、わからない。帰ってくるかも知れないし来ないかも知れない」

微笑んで首をかしげて見せた。自然に笑えたと思う。

誰ももう僕を留めることは出来ない。僕は自分の性質に気づいてしまったのだ。

少女は僕の方が見えなくなるまで手を振っていた。いつまで振っていたのかは聞いてみないとわからない。だが、それを聞きに戻ることもない。

こうして、心臓を巡る物語は幕を閉じていった。

ここから僕のための僕の旅が始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5884f/>

マインドウォーカー

2010年10月8日13時44分発行